

平成 20 年（ワ）第 1978 号，第 2900 号 ウィルス性肝炎患者の救済を求める全国 B 型
肝炎訴訟・九州訴訟損害賠償請求事件

原 告 原告番号 1 番ないし 44 番

被 告 国

意見陳述書

平成 20 年 12 月 3 日

福岡地方裁判所 民事第 2 部 御中

原告番号 1 6 番

1 はじめに

原告番号 1 6 番です。

私は B 型肝炎に感染しており，現在慢性肝炎です。

感染が分かったのは，27 歳の時，長女を妊娠している時でした。出産前の血液検査で分かりました。

結婚して 4 年目，なかなか子どもができず，やっとめぐまれた子どもでした。私も夫も，両親も，待ち望んでいた子どもができて，とても喜んでいた矢先でした。

医師からは，将来，肝硬変や肝がんになる可能性が高いと言われました。また人にうつさないようにと注意され，生まれてくる子どもには出産後すぐにワクチンを投与して感染防止対策をとると言われました。「出産時の処置を他の人とは別にしなければならぬから大変だ」と言われたことを覚えています。

私は，生まれてくる子どもに感染させないだろうか，これから母親としてやっていけるだろうか，とても不安な気持ちになりました。

2 娘たちへの感染

長女を出産したときのことは今でも忘れることはできません。

赤ちゃんの元気な泣き声を聞き，看護師さんから「可愛い女の赤ちゃんですよ」と言われました。待ち望んだ子どもが無事に生まれ，ほっとしたのもつかの間でした。長女は，すぐにワクチン投与のために別の総合病院に搬送されました。初めての子どもを抱きしめることも，顔をよく見ることもできないまま引き離されてしまいました。

退院するまでの 1 週間，自分で母乳をしぼって長女の元へ届けてもらいました。母乳をしぼるたびに，娘は元気だろうか，私と夫のどちらに似ているだろうかなどと思いめぐらせました。我が子を抱いてお乳を飲ませられないことが，とてもせつなく思われました。また，ワクチン投与のために，娘が小さな体に注射針を刺されていることを想像すると，とても辛い思いでした。感染してしまったのではないだろうか，とても不安な日々でした。

退院する際、初めて抱いた我が子は、本当に愛おしく、天使のように見えました。母親の喜びを感じました。私が初めて抱いたとき、長女は目も見えないのに笑ったような顔をしました。それを見たおばあちゃんが「笑いよるばい」と言ったことが今でも忘れられません。

しかし、喜びもつかの間、医師から、長女が感染してしまったことを知らされました。それを聞いて、自分のせいで長女にうつしてしまい済まないという気持ちでいっぱいになりました。せめて、この子が幸せになるように精一杯のことをしてやりたいと思いました。

その後、次女と長男にもめぐまれましたが、次女も母子感染防止がうまくいかず、B型肝炎ウイルスに感染してしまいました。長女だけでなく、この子にもこれから先ずっと辛い思いをさせてしまうと思うと、可哀想でなりませんでした。

3 娘たちの成長

娘たちは、1ヶ月健診や3ヶ月健診のたびに、検査のため採血をしなければなりませんでした。小さな腕に注射針を刺されて泣き叫ぶ幼い我が子を見て、可哀想でいたたまれない気持ちになりました。次女は物心つくころから、白衣を着た人を見るだけで泣き出すようになりました。

娘たちが、保育園や小学校に通うようになると、娘たちがB型肝炎ウイルスに感染していることを先生方に伝えました。いじめられてつらい目にあわないだろうかと不安でしたが、他の子どもさん方に感染させないように注意してもらわなければなりませんでした。

娘たちには、小さなころから、怪我をしたり鼻血が出たりしても必ず自分で拭いて処理をし、人に血液を触らせないように厳しく注意しました。幼い娘たちは言いつけを守ってくれました。叔母が遊びに来て食事をしている最中に、長女が鼻血を出したことがありました。まだ保育園児でしたが、一人で後ろにさがり自分で処理をしていました。娘の感染を知っている叔母は、それを見て、こんなに小さいのにきちんとしていると感心していましたが、何だか可哀想だという表情をしていました。娘たちには可哀そうですが、やってあげたい気持ちを押し殺して、1人でできるように厳しくしつけていました。

4 発症と娘たちへの心配

私は、5年くらい前から、強くからだのたるさを感じるようになりました。病院を受診したところ慢性肝炎と診断されました。

次第に、少し活動するとすぐに横になりたくなるが多くなりました。3年くらい前には息をするのもきつくなり医師にすすめられて入院しました。このころから抗ウイルス薬ゼフィックスを飲むようになりました。昨年も入院したのですが、ゼフィックスだけでは効かなくなり、ヘプセラも併用するようになりました。

現在もこれらの薬を手離すことができませんが、これらの薬もいつまで効くか分かりません。

抗ウイルス薬を飲み始めたころ、病気のことが気になり、本やインターネットでB型肝炎について情報収集しました。調べていると、「抗ウイルス薬を服用している人が妊娠すると胎児に奇形が生じる可能性がある。このため妊娠は避けたほうがよい。」と書いてありました。

娘たちのことが頭に浮かびました。私は、3人の子どもにめぐまれ、母親の幸せを味わうことができました。しかし、もし娘たちが若いうちに発症して抗ウイルス薬が必要になれば、子どもを持つことを諦めざるを得なくなります。ことの重大さに気付かされました。娘たちに、子どもを授かったときの母親の喜びを経験させたいと思っていたのに、それも叶わなくなると思い、自分を責めました。

昨年、長女と一緒に検診に行ったところ、長女が医師から、「交際する男性にうつさないように」と注意を受けていました。私はとても情けない思いにとらわれるとともに、自分がずっと心に抱えながら避け続けていた問題を突きつけられた気がしました。

現在長女は24歳、次女は22歳です。娘たちは、既に結婚してもおかしくない年頃です。B型肝炎ウイルスに感染していることを相手には告げなければなりません。それは娘たちにとって大変つらいことだと思います。結婚するとなれば相手のご両親にも知ってもらわなければなりません。それはさらにつらいことだと思います。そのために結婚がだめになるかもしれません。

また、若いうちに発症してしまったら、娘たちは相手を気遣って結婚を諦めてしまうかもしれません。そんなことで娘たちが思い悩まなければならないと思うとたまらなくなります。

最近、娘たちが、発症したらどうしようとか、結婚はどうしようとか、どっちが先に死ぬのかな、などとよく話しているということを知りました。娘たちは、心配かけまいとして私には話しませんが、思っていた以上に大きな不安を抱えていることを知りました。

最近娘たちは2人ともウイルス量が増えており、いつ発症してもおかしくない状態です。長女は、今年の夏に肝臓にポリープが見つかりました。悪性ではないと言われましたが、今後は半年に1回は検査に来るように言われており、現在経過観察をしています。発症したら結婚もできないのではないか、仕事もできなくなるのではないかと思うと、娘たちの将来がとても不安になります。

5 最後に

私は、自分が肝炎になったことより、娘たちに大変なものを背負わせてしまったことが悔やまれてなりません。私の体はどうなってもいい、娘たちには人並みでいいから幸せな人生を送ってもらいたいと強く思います。

そのために、娘たちの病気が治るような治療法を開発して欲しい、せめて娘たちが発症しても安心して最高の治療が受けられ、できる限り普通の生活が送れるように、長生きができるようにして欲しいと願っています。

その願いを叶えるために、私は自分の思いをしっかりと皆さんに伝えたいと思い、実名公表を決意しました。家族への影響を考えると不安でしたが、娘たちも同意してくれました。

今日、ここで実名を公表します。

私は、梁井朱美です。

娘たちに母子感染させてしまった母親です。そして、娘たちがB型肝炎から解き放たれることを、願ってやまない母親です。

どうか裁判所におかれては、私たちの切なる思いを理解していただきたいと思います。

以上